

三月三十一日（金）

いつもの我が家では信じられないぐらい、あつちにもこつちにも煌々と灯りがついている。微妙な緊張感を保ったまま、いつもはしない「脱衣所での着替え」を済ませ、適当にほっぽり出しておく見られたくないものはしつかり隠して、鍵を開ける。

「へー。それが部屋着？」

ハンガーにかけるパンツを抱えてキッチンを横切ると、当たり前のように食卓でお茶を飲む透に声をかけられた。一瞥だけくれて、すぐに自分の部屋に入った。キッチンから呼びかける声が聞こえてくるけど、反応すればするだけ調子に乗るのは分かっている。ガン無視を決め込んで、形を整えてパンツを掛ける。消臭スプレーも振っておく。

ここの灯りは落としてからキッチンに向かう。そつちを見ると、透が椅子から立ち上がるところだったから、ちよっぴり冷や冷やした。後ろ手に外から静かに鍵をかけ、何事もなかったかのようにキッチンで手を洗う。透はそれを横に突っ立って眺めている。

「何？」

タオルで手を拭きながら、透の顔を見上げた。「いや、別に」と言いながら、彼は私を頭の前から爪先まで、じっくり上から舐めるように見ている気がする。

そこを退け、と手で示し、透に前を開けさせる。食器棚からグラスを取り出し、冷蔵庫から五〇〇mlのビール（正確にはリキュール）を取って食卓に腰を下ろした。

「オレももらつていい？」

「勝手にどうぞ」

彼は今までお茶が入っていたグラスを空けると、そこに私のグラスに入りきらなかつた残りのビールを注いだ。美味しそうに一口飲んだ。

「何？」

「透もビール飲むんだなあ、と思って」

「何だよ、それ」と言いながら、彼はもう一度、グラスに口をつける。ビール

を飲む姿どころか、今着ている仕立ての良さそうなスーツ姿も見慣れない。どうしても、坊主頭で野球部のユニフォームを着ていた姿を重ねてしまう。

「洗顔はいいのか？ お肌の曲がり角はとつくに過ぎてんだろ？」

「あんたが帰ったらするから、お構いなく」

透は、私のグラスが空になりそうなところで冷蔵庫の前に立つ。「もう一本いる？」の仕草に頷くと、流れるような手付きで私のグラスと自分のグラスに半分ずつ注いだ。

「帰るよね？」

「どうしよつかな。久々にココでお泊まりするのもいいな。思い出のベッドで一緒に寝るつてのも、アリだな」

「はあ？」

こいつ、今年の年賀状に愛娘との写真を載せてたのに……。

「冗談、冗談。コレ飲んだら帰るよ。遅くなりすぎると嫁にも怒られるし」

透の、人を馬鹿にしたような笑いに何度ブチ切れてきたことか。でも、私はもう大人。そんなムカつく顔で一々腹を立てないし、煽り文句も華麗にスルーしてやる。腹式呼吸で苛立ちもしつかり身体の外へ吐き出した。

「ルミはルミのままだな。元氣そうで良かった」

彼はグラスに残ったビールをグツと飲み干した。

「じゃあ、オレはコレで。また飲もうぜ」

透は席を立ち、椅子にかけていたジャケットを羽織り、コートを腕にかけた。カバンをしっかりと握って、玄関に向かう。彼が出ていくと、滅多に人が来ない我が家にまた戻る。

「また飲もうぜ」のセリフに若干イラつきながら、普段より灯りの多い家で独りになると思うと、ちよつぱり怖かった。

初出 令和三年四月二九日 小説家になろうにて公開